

「から(に)」をめぐる解釈史から 近世の語法書を中心に

About interpretation of "kara (-ni)" found to language study book of the Edo era

塚本 泰造

はじめに

塚本 (二〇〇一) (二〇〇二) では賀茂真淵・本居宣長の著述 (擬古文)⁽¹⁾ において、次のような中古和文に例のない逸脱した「から(に)」の用法を指摘した。

「なびけこの山」と幼稚な願いをそのまま出したのは「まことのもと」とであるが、後世人は此心を忘れて、巧みでのみ哥はよむからに、皆そらごとと成ぬ、

(万葉考 全集一卷 P 一二〇 傍線部は塚本。以下同じ)
侍宿と書からは、こ(侍宿)は殿宿也、

(万葉考 全集一卷 P 一四二)
外国を内になしたる言のみ常に多かるは、からぶみをのみよみなれたるからの、ひがことなりかし

(玉勝間 思想大系 P 二五)
そは書紀を一わたり見て、かのかざり多かることを、よくも考へず、文のまゝに意得るから、さも(上代から文字はあつたと思ふぞかし)
(古事記伝 全集九卷 P 一七)

そは巻のはじめつかたに、宰相中将とある此官に任せられたるを、十六の時とし給ふからの誤也

(源氏物語玉の小櫛 全集四 P 二七四)

又りとるは、上のてにをはのかゝりによりて、異なることなるを、たがひに誤れるところのおほかるは、近き世の人、すべててにをはのととのへをしらざる故に、いづれにても同じことと心得て、おろそかに思へるから也

(源氏物語玉の小櫛 全集四 P 三一六)

これらは因果関係の表現であり、その原因理由の部分強調するときに現れるものである。右の例からもうかがえるように、自らの学問の成果を論拠として、当時の学説・学問を批判し新しく主張しようとする表現欲求が、古語「から(に)」の新しい用法を生み出しているのである。そしてこの用法は、日本語が論理性・分析性を強めて表現を分化させる傾向、この「から(に)」に限って言えば、「ば」「ゆゑ(に)」によって大まかに前件と後件とを結びつけるのではなく、それ以外のことばで、より細かに結びつき方を表現し分けていこうとする傾向の反映でもある。

さて、学問における近代的思考の最小の表現は論拠を前件とする複文(Aという論拠があるからBである)であろう。その点から言えば、国学者の擬古文において、右の新しい、逸脱した用法が複文の接続助詞相当の個所に現れるのは当然である。しかしながら、それではなぜその新表現・新用法が、この二人の国学者の場合、「から(に)」ということばに表れたのであろうか。他の候補として、

たとえば「より」「ままに」「あいだ(に)」「ほどに」「なべに」「な
どを選ぶこともあり得たはずなのである。

真淵・宣長の擬古文が現れたころ、上方口語には「からして」「
てから」があった。口語すなわち俗語の接続助詞としての「から」
は江戸において成立しつつあった²⁾。とすれば、この用語の選択
には、当時の学問において「から(に)」がどのように解釈されて
いたかが作用していよう。古典研究の途上で雅語・古語として「か
ら(に)」の価値が発見されなければ、擬古文に「から」を使うは
ずがないからである。

ただし、「から(に)」が使われている歌の全ての注釈書を見るの
は困難である。したがって、たとえば古今和歌集の歌にせよ百人一
首にせよ(文屋康秀「吹くからに」)、一つ一つの歌に限られた解釈
によるよりは、「から(に)」ということばそのものの解釈をpushさ
えておく方が効率的であろう。その点、いわゆる国語学史においてと
りあげられる語法書の方がこのアプローチには最適である。

すでに、当時の「からに」の解釈の様相については、『あゆひ抄』
の補注として竹岡(一九六一)に記述があるが、『あゆひ抄』及び
それ以降の説も解釈史の流れの中に位置づけるには、さらに用例を
詳しく丁寧に補う必要がある。

本稿では、現時点で探し得た、近世の主要な語法書の「から(に)」
に関する記述を通して、真淵・宣長が「から(に)」を選んだ事情、
さらにはこのことばの解釈と価値の発見がもたらした影響を考察す
る。粗描の域を出るものではないが、中間報告をあえて試みる次第
である。

まず、真淵・宣長の「から(に)」の解釈を見てみよう。

(「君自二」キミカラニに對し) からは、よりにもゆゑにも轉
し通はせり、別記あり、 (万葉考 全集一卷 P.二〇六)

此卷に、思就西、君自二、戀八將明、とよめる、このからは、
従とも故とも聞ゆ、まづ故は、ゆゑともいひて、物の本あり因
有る事をいへり、然れば、上の言の意を受けて加留我由恵と云は、
此有之由てふ言にて、上にいへる事を由縁としていふことば也、
さて此かるがゆゑを約めてかれともいへり、…其加礼と加良は
音通へり、仍て、君加良爾を、君由恵爾といひても聞ゆめり、

(万葉考別記 全集二卷 P.三〇七)
このように、真淵は万葉集の例を通して、結局「から(に)」はほ
ぼ「ゆゑ(に)」に等しいとする。宣長は、語源については異を唱
えながらも、

【また加良爾といふ辞、故といふ意に近ければ、加禮は、加良
の活きたるかとも思へど、然にはあらじ、加良は別なるべし、

(古事記伝 全集九 P.四〇)

(因己物而「オノガモノカラ」について) さて此母能加良は、
常に云辞のものから【思ふものから、云ぬものからのたぐひ、
【とは異にして、物は己が物にて、【辞に非ず】加良は、字の
如く因ての意なり、古今集【恋四】に、己が物から形見とや見
む是と同くて、加良の意は姑く異なり、

(古事記伝 全集一 P.五四四)

「思ふからといふべき所を、」思ふものからといふ「あらぬ故
にといふべき所を、」あらぬ物からといふたぐひとおほきは、

たゞからといふと、同じ意と思ひ誤れるなめり、たゞからと物からとは、おほかたうらうへのたがひあるをや、

(玉あられ 全集五 P 四八二)

「から」を析出し、真淵と同じく原因理由をあらわすことばととらえている(「因て」「からと物からとは」)。

そして、両者ともに共通しているのは、上代の文献「万葉集」「古事記」を考察する中で、「から」を古語であり雅語であることばとしてとらえざるを得なくなっていることである。

たとえば、竹岡(一九六一)が引用しているように、中世歌学の場合、三代集などに代表される勅撰集が主な研究対象であったので、「から(に)」は古語「なべ(に)」を解釈することばとして現れていたようである。

なべ、からになど云ふ心也。

(奥義抄 日本歌学大系第壹巻 P 二五三)

「から(に)」の方が「なべ」より新しくかつ古語的であったからこそ、解釈することばとして使われている³⁾。

しかし、「万葉集」などの上代文献を研究する場合、逆に「から」の方が古語であると認識される可能性があったと思われる。

アスヨリハツキテキコエムホト、キスヒトヨノカラニコヒワタルカモ
ヒトヨノカラニトハヒトヨノアヒタニ也

(仙覚 萬葉集註釋 P 四六二)

歌学が中古の和歌を主な研究対象としたのに対し、国学は上代への志向を鮮明にしている。研究対象の逆行がやがて古語としての「から」の復権をもたらしたのではないかと考えられる。

真淵・宣長と同時代で、伝統的歌学を受け継ぎつつ国学・漢語学

の影響も受けていた富士谷成章は「より」と「から」とを比較して次のように述べている。

「より」「から」もとより同じ詞にや・大哥に 昔より昔からと歌へり・上つ世には「より」少く「から」多し 「より」

は「ゆ」とも詠めり・中昔よりは「より」多く「から」少くなりて・中頃の末よりは・ひとへに哥には「より」とのみ詠む事になれるを、今の里言には・又『から』とのみ言ひて『より』と言ふ事すくなきは・今の古に帰るなり

(あゆひ抄 全集上 P 八〇九)

同様の言は 稿本あゆひ抄 全集上 P 三九六
「上つ世」に「から」が常用されていたことが発見されているのである。

また「から」の復権は、「から(に)」を、解釈上、原因理由を表すことばとして位置づける過程と重なるようである。富士谷成章は、現在の接続助詞にあたる「装をうくるから」という脚結を「よりはや」「といふとはや」と訳しつつ、「から(に)」自体は「余利家」の一つとして、「ゆゑ(に)」と併置されている。逆に、宣長は前述のように「から(に)」を原因理由を表すことばとして理解していたが、古今集の「からに」の使われている歌を「トソノママ」と四例訳している(『古今集遠鏡』)。

次に、この二つの流れが、真淵・宣長・成章前後の近世の語法書のなかで、どのように現れているかを見てみよう。

「から(に)」の古語としての復権および原因理由への同定、これらの最初の姿が伺われるのは、管見では近世の俗語辞書『志不可起』(一七二七成立)であった。

から 今世ニそれからこれからナド云ハ自(ヨリ)ト云ニ聞ユ亦さうござるからかうござるからナド云ハ間(アイダ)トモ程(ホド)トモ從(ヨツテ)トモ聞ユ亦故(ユヘニ)トモ聞ユ：哥ニ吹くからにきくからにナドモ間程從故ノ四ツニ聞テモヨシ
神世卷二一夜(ヒトヨ)之間(カラ)ニ云云 P五〇

(以下影印本の傍訓は()内に示す)

古語「から(に)」と俗語「から」は「あいだ」「ほど」「よって」「ゆゑ」のいずれかにあてはまるものとされている。加えて上代にも「から」が見つけられている。『互邇平波義慣抄』(一七六〇成立)においては、万葉に、つまり古語として「から」「より」「ゆゑ」が見られることを指摘している。

からといふ詞によりとおなし意あり。萬葉に從の字を、からともよりともゆとも點せり。由といふもよりの意也。

(国語学大系 第七卷 P二二三)

さらに、村上織部『古今集和歌助辞分類』(一七六九刊か)において、はつきりと「から」は「ゆゑ」と結び付けられている。その主な論拠となるのが上代のことば「神から」「故(かれ)」である。

○加良といへる語末の助辞。三種あるに似たり。

其一には彼事情の随(まゝ)にとも。亦此事情の故にとも聞ゆる辞あり土佐日記に守(かみ)からにやあらんと云しも。国守(くにのかみ)に随(したかふ)にやとも。国守故(ゆゑ)に

やとも聞え。万葉にかみなから云云といへる語を。多く神随(かみなから)と書しは。其義を得て然り。亦かみからといへる語も。神なからといふことを。句調にしたかへし約言なるを。神柄(かみから)とも書しは。句調を違(たが)へざらんか為に。柄字の訓を假りしのみ。されは随は從也。順也と注し。亦故は事因也とも注せし。漢字の義に相かよひて聞ゆるあり。(二ツ目ハイワユル格助詞ノ「から」、三ツ目ハ「ものから」コレヲ例歌ヲアゲテ説明ノノチ)そのかみは故字を書てもからと訓(よみ)しを。後にゆゑと訓て假字には書けるにや。

P二三〜二五

真淵は上代語「故(かれ)」を論拠として「から」と「ゆゑ」と結びつけ、宣長は「故(かれ)」を論拠とするのは避けたが、これも原因理由を表すと考えていた。

一方、成章はあくまで三代集のことばを対象に、慎重に接続助詞相当の「から」を「よりはや」「といふとはや」と訳して、原因理由を表すものとはしていないが、「から」自体は脚結の一範疇「余利家」に属している。そこに所属することばは、

より・から・からに・ものから・づから・ゆゑ・ものゆゑ

であつて、「ゆゑ」と「から」は「より」を介して結び付けられている。同じ中古の歌語を対象とした梅井道敏「蜘蛛のすがき」(一七八一刊)では、「から」と「ゆゑ」は等しくなる。

○から

古今集に

なかしとも思ひそ果ぬむかしよりあふ人からの秋のよなれば
此人からはあふ人ゆへのといふ心也所から宿からもおなし故の
字の心也此所から此宿からと称していふ也……

○なへ

なへはからにゆへにといふ心に通せり P 七二〇七四

俗語「から」が実は上代に系譜が引けることばであつて、したがつて古語「から」として再発見されてきたこと、原因理由を表すことばとして把握されてきたこと、これらの事情を明瞭に語るのが成章の子富士谷御杖の『俳諧天爾波抄』(一八〇七刊)である。

から からといふは たゞよりの俗語のやうにおもふ人あれども、さにあらず古言に多くつかひたるてには也。中昔のほどよりはよりの方雅也とおもひけん物名などに辛崎「いつからさきにとよみ兄弟」あまのはらからなどつかひて多くみえぬは、哥よみもはや中昔の比よりかくあさましくなれるをみるべし。…

これに二例ありて、「名から」装からと云、「名からは物名をうけ」装からはよそひの詞をうくるを云、その「名からは」後世にもまゝつかふ也。いはゆる「宿から」我からなどの類なり。抑このからといふ詞は、上古に、故の字をかれと訓じてよむ。即此心也。さればなに事にもあれ、その故をふまへとしていふ詞なり。よりはもと依因などの心にて、そのものをより所と定めて、さてこなたの事をいふためなれば、くはしくはゞ、からはかなたを主とし、よりはこなたを主とする心あり。

ゆゑ ゆゑとは、俗にもつねにいふ詞也。これは上のからといふ詞にひとしきやうなれども、からといふ時は、その故よりおこりたる所にていふなり。ゆゑといふ時は、その内の故をさす心ある也。いはゞゆゑとはその末より本をさし、からとはその本より末をさす心なり。…

(新編富士谷御杖全集 第七卷 P 五一七〇五一九)

「から」は実は古語であること、上代の語を論拠として「ゆゑ」とほぼ等しいと述べている。したがつて上代のことばをもとに脚結について定義した『脚結玄義』(一八二一成立)においても、

○から もとそこよりおこる義なり二例ともに心え同しそこからおこりてはかくなるへき事なるにさはなくてかくなるといふ心に用ふるなりそのかくなるへき理なりといふ所を思はせんの手段なり

○ゆゑ からの用ひさまに同しくその故にかくあるへきといふ事をはふきそこを思はせんかために下にその理にたかへる事をよむなり

(新編富士谷御杖全集 第七卷 P 六八〇〇六八一)と微妙な差異はあるが「から」と「ゆゑ」をほぼ同じ意味のことばととらえている。同じ脚結学派であつて上代語をもとに脚結を考察した(竹岡(一九六二)による)保田光則『脚結抄増補』(一八五一以前成立)では、

一装から一六 里わろし 只故(かれ)の義なり：
一何物から なからの略なり 名からのからにもなからの略有：
又からを「なる物を」と里するもよし 故を万葉略解などに然(しか)解(トケ)り「人孀故(ツマユエ)」には人つまなる物をと解り 凡そ故の字(ジ)をゆゑともかれとも訓て又かれとからと詞通へり里言も相通はして説へし：

(富士谷成章全集 下 P 六八七)というように、上代語「かれ」を論拠として「ゆゑ」と等しいとし、成章の説を否定さえしている。

同じく、万葉語研究から説を立てた鹿持雅澄の『古言訳通』(一

八三七成立)では、

からに チヤニ ニヨツテ

四ノ卷五十六丁に：物可良爾ハ・モノチヤニの意なり・廿

ノ卷五十八丁に：(手爾等流可良爾)とあるは・手ニ取ニ

ヨツテの意なり 夏二十五ウ

ゆゑに ナルモノヲ チヤニ ニヨツテ 冬四十三オ

と訳しているように、「からに」と「ゆゑに」は同じ意味ことばと
なっている。

この点、次の『浮世風呂』(一八〇九〜一三刊)に見られる、有名な上方のことばと江戸ことばの優劣論も、江戸ことばの威信を主張するのみならず、古語としての「から」発見という流れに符号するものである。

かみ「：さうだから斯だからト、あのまア、からとはなんじや
エ 山「から。」だから「から」さ。故といふことよ。：百人

一首の歌に、文屋康秀吹からに、秋の草木のしほるればトある
よ。ソレ吹からに、ネ。よしかへ。吹ゆゑにといふことを、吹

からにさ。：

(新日本古典文学大系八六 P一〇四〜一〇六)

神保(一九六八) P三六八〜三六九によれば、この説はおそらく馬
琴の黄表紙『臍沸西遊記』(一八〇三刊)の登場人物の説によつて
思いついた耳学問にすぎないということである。もっともこれは馬
琴自身も随筆『羈旅漫録』(日本随筆大成第一期1) P二二七)に
自説として述べるところである。「から」の復権という流れの中で、
雅俗の違いは一方が百人一首、一方の学問の世界が万葉・記紀の上
代語に論拠を求めたということになる。

三

「から」が古語として注目されるようになると、古語研究の成果
として、語法書の記述も変わらざるを得なくなるはずである。

近世の語法研究のなかで一つの焦点は活用の整理であった。この
分野において一定の評価と大きな影響を与えたのが本居春庭『詞八
衢』である。その活用表「四種の活の図」では現在の連体形にあた
る形を判別する「受るてにをは」として「かな・まで・に・を・よ
り」を挙げている。「から」と「より」との親近性がすでに指摘さ
れ、古語として「から」が復権するのであるから、この種の「てに
をは」の代表として「から」が入り込んでくる過程がうかがわれる
のである。

蘭文典の影響下に語学を立てた鶴峰戊信もいわゆる自立語と助詞
との関係すなわち「格関係」の記述において「から」を考慮に入れ
始めていた。

(所奪格のてにをはとして)より ゆ から ゆゑテフ詞まで
テフ詞モよりニタグヘル辞ナリ

『語学究理九品九格総括図式』(一八二九刊)

(国語学大系第二卷)

『語学新書』(一八三三刊)においても「与利属」の一つに「由
恵格」とともに「加良格」をあげ、「またをしむからは受連体言也。」
と注している(国語学大系 第一卷 P三〇三)。

義門『活語指南』(一八四四刊)や富樫広蔭『詞玉橋』(一八四六
成立)ではまだ「受るてにをは」に「から」はみられない。ただ、
『詞玉橋』の稿本付録に

(続体言ヨリ受ル辞)より は俗にカラト云コトナリ 今より

ト云コト俗ニハ今カラト云フナリ

P二〇〇

とあり、また『辞玉櫛』(二八二九刊)に活用表欄外の形で、

続言段並言にをよりががにがねばかりだに
さへすらごとからながら

を挙げている。

そして以上の「から」の取り扱いを総合しているのが、黒沢翁磨

『言霊のしるべ』(一八五二／一八五六刊)であった。

からからは故(カレ)の活きたる詞にして：(以下割注に)
宣長は故(カレ)はかかれの略りたるにてからとは本より異
なりと云りそは故(カレ)は詞の上に付る詞からは詞の下に付
る詞なればさもやとも思へどよりてふ詞もからにひとしく詞の
下に付る詞なるを所によりては詞の上へめぐらし用る事も常な
れば猶かれから一物にてれとらと通ひ活きたるものと見む方お
だやか成べし(以上割注)是から夫からなど常にも云即是也扱
よりと並びて是より夫よりと云も同じ又見るによりて聞により
てといふ事を東人(アヅマビト)は見るから聞からとやうに云
り：扱万葉に神がら國がらなど多くよめるも又今の俗言に家が
ら人がら心がらなど云るがらも皆同じ。 P九四

ながら：扱ゆゑからよりものゆゑものから物のながら何れも
皆一心の詞にして異なる事なし：先ゆゑからよりの三は同じ心
なる事誰も能知事にて殊更に云には及ばず：但からは見るから
きくからと様に用言より受る格なるをながらは見ながらき、な
がらと様に体言より受る格なり：猶いはながらは万葉に神が
らとよめると二(フタツ)ともにあまたある皆同じ事なるをも
思ふべし 俗言に家がら人がらなどいふも家の故人の故といふ
心なるをも思ひ合すべし P一一〇～一一一

(受る辞の事並図)にを はも がぞ なん かな ま

で より から なりけり P一六〇一七、P三二〇三三

上代語を論拠として古語「から」を認め、「ゆゑ」と等しい意味と
し、「受るてにをは」の一つとして「から」を「より」と併置させ
たこと、すべて粗描してきた流れを総合した記述である。

おわりに

以上現時点で探し得た記述をもとに「から(に)」をめぐる解釈
史を述べてきた。真淵・宣長の場合、時代の学問の上代志向によつ
て、「から」は古語・雅語としての価値を再発見される過程にあつ
た。「ゆゑに」とほぼ等しい、このいわば新しい古語は擬古文にお
いて活用の場を与えられたのである。日本語の表現の分化の中でよ
り細やかに因果関係を表現しようとする、どうしても従来の古語
「ば」「ゆゑに」では駒が足りない。その時、今まで俗語と思ってい
たものが実は由緒正しいことばで、擬古文においても使えるものと
確信すれば、それは当時の思想・感情・論理の表現を担って使われ
たであろう。特に宣長の場合、「から」は因果関係の表現において、
その主張に一つの強調を付け加えるものとして重宝されたと考えら
れる。

ただし、後世この便利な古語「から」は宣長の保留、成章の異見
にもかかわらず、「ゆゑ(に)」と等しいとされておられ、宣長以降の
擬古文にどう使われているかは今後の検証を待たねばならない。

参考資料

日本歌学大系 風間書房

国語学大系 国書刊行会

仁和寺藏萬葉集注釋 京都大学国語国文資料叢書別卷二 臨川書店
志不可起 近世文学資料類從 参考文献編七 勉誠社

古今集和歌助辞分類 勉誠社文庫七五

蜘蛛のすかき 和泉書院影印叢刊一七

古言訳通 万葉集古義附卷 万葉閣

本居宣長全集 筑摩書房

本居宣長 日本思想大系40 岩波書店

賀茂真淵全集 続群書類従完成会

新編富士谷御杖全集 第七卷 思文閣

詞八衢 勉誠社文庫一三九

活語指南 勉誠社文庫一一

詞玉橋・辞玉襷 勉誠社文庫六四

参考文献

神保五弥 (一九六八) 『浮世風呂』 角川文庫

竹岡正夫 (一九六一) 『富士谷成章全集 上』 (風間書房)

竹岡正夫 (一九六二) 『富士谷成章全集 下』 (風間書房)

塚本泰造 (二〇〇一) 「本居宣長の著述 (擬古文) に見られる「か

ら」について」『筑紫語学論叢』(風間書房)

塚本泰造 (二〇〇二) 「賀茂真淵の著述 (擬古文) における「から」

系のことば」『国語国文学研究』三七

中村幸彦 (一九五五) 「擬古文」『国語学辞典』(東京堂出版) 執筆

項目

山口堯二 (一九九六) 『日本語接統法史論』(和泉書院)

(1) 定義は中村 (一九五五) に従う。

(2) 山口 (一九九六) によれば、「から」が明確に原因理由を表す接統助詞となるのは、近世後半期の江戸語からである。

(3) 「承暦二年四月二十八日内裏歌合」(『歌合集』日本古典文学大系七四P一八八) では、「からに」とよめることはいかなることぞ」と難が出ているが、これは歌にそのような俗語を使つてよいのかという意味と考えられる。